街並みウオーキング　　2017.10.29

刈谷市「元刈谷地区」の史跡・文化財をめぐる

今年も１０月29日「元刈谷元気なまちづくり実行委員会」が主催する、史跡巡りに参加しました。今回は８時３０分から１１時の予定で、お寺さんの文化財の拝観を中心に開催され、楞厳寺・専光寺・実相寺を尋ねました。堂内は撮影禁止のため写真の記録が出来ず、およそのまとめになりますが私流に整理しました。

1　雨の中６０余名が参加

台風が接近するというあいにくのお天気にもかかわらず、多くの方が参加しており驚きでした。受付を済ませて辺りを見回すと、会社時代の青木君の顔が見えたので「ヤアーヤアー」と挨拶を交わしました。また、今回のガイドを担当する都築さんや、事務方の井野さんの顔もあり挨拶しました。

実行委員会会長のあいさつが終わるとすぐに出発です、３班に分かれて別々のコースで回ります。私は２班になり、最初は楞厳寺へ向かいました。地下道をくぐり本刈谷神社のわきを通っていきますが、何もお話はありません。途中には路地があったりしますが、ここも特に説明はなくまっすぐにお寺さんへ向かいます。元刈谷地区は昔からの集落が発展した地域だと思いますが、昔からの道路はここでこの道は新しくできた…など地元ならではの話を期待していたのですが、それはなかったです。
それというのも、今回は『史跡・文化財巡り』として企画されており、お寺さんのお宝を拝観するために事前に参加者名簿が作られ、当日の受付はしないという徹底ぶりでした。こうした企画も、なるほどと思う面があります。

東浦の歴史講座でこの地区のお寺さんの特徴を学んだことがあり、狭いエリアに何故五つもお寺さんがあるのか、お寺さんの特徴などもそれなりに承知していました。しかし、記憶は忘れがちとなり改めて学ぶことが大切と感じています。

2　刈谷水野家の菩提寺「楞厳寺」---曹洞宗

楞厳寺は水野家のつながりで特に関心を引くお寺さんです。以前にもお宝を拝観していますが、今回はじっくり観ることが出来ました。ただ堂内の写真撮影は禁止ということで、

確かな記憶があるわけでもないので、大雑把なことしか整理することが出来ません。

① 見分けがつかない「於大の方」と「お富の方」の肖像画

県指定文化財の「於大の方」の肖像画は着衣や文様調度はいずれも桃山以前の風俗を示している、於大晩年の肖像画だという。白いズキン姿でりっぱな文様のある台座に座る姿が描かれている。これと全く同じに見えるいでたちで描かれている、「お富の方」の肖像画は市指定の文化財となっています。おそらく「於大の方」の肖像画が描かれた以降に描かれたことで、このような肖像画になったのだろう。

また、水野忠重の肖像画は甲冑姿の侍ではなく、公家のいでたちで描かれている。彼は刈谷城主、初代藩主勝成の父。信元が信長の命で殺害され、緒川城・刈谷城ともに佐久間信盛の領有となる。その 5 年後に緒川城に水野忠守、刈谷城に水野忠重が復帰する。しかし、忠重は関ヶ原の戦い直前に知立にて加賀野井秀望に殺されてしまった。そんな不幸が続いた水野家だったが…

② 於大の方の調度品

於大の方が岡崎の松平から離縁されて、刈谷に戻された際に持ち帰ったものと言われる、器 4 点が市の指定文化財になっている。天目茶台には金蒔絵、白磁の茶碗には葵の紋が施されている。

整備された水野家御廟所全体と一番奥が信元の墓(以前に撮影したもの)

③ 水野家御廟所

水野忠政の子供たちのお墓がある、が、ここには刈谷城の初代城主水野勝成のお墓はない。信元、忠重のお墓と妻たちのお墓である。歴史の評価は一つではなく、いくつかの見方がありこうだと断言することは難しい。しかし、緒川城で於大が生まれ、岡崎の松平広忠に嫁ぎ家康が生まれたこと、その家康が天下を統一して戦のない世の中を実現したことは間違いない。その過程において水野家が大きな役割を果たしたことも、間違いのないところだろう。

3　樹齢 550 年の楠がそびえる専光寺---真宗大谷派

次に向かったのは浄土真宗大谷派の専光寺、ここは天台宗のお寺であったが室町時代蓮如上人が訪れた際、住職が帰依し真宗に改めたといわれる。山門をくぐると本堂の前にとても大きな楠が存在感を示している。これは蓮如上人お手植えと伝わるもので市指定文化財になっている。東浦では伊久智神社の大楠が 300 年～400 年の古木といわれているが、それよりもさらに 150 年余も長寿だというからすごい。枝ぶりもよく整っており立派なもので、根元には保護するために藁のようなものが敷き詰めてあった。

① 絹本淡彩真慧上人画像(ケンポンタンサイ シンネショウニン)

真慧上人は浄土真宗高田派中興の祖である。上人は永享 6 年(1434)に誕生し、永正 9 年(1512)に 7 9 歳で亡くなった。この肖像画は室町時代後期のものといわれ、少し若い姿で描かれている。

上人は下野国高田専修寺の第十世で、専修寺の教えを北陸方面、東海、近畿に広げるとともに朝廷の崇拝を得て、専修寺は朝廷の御祈願所になった。この肖像画は昭和 37 年に市の文化財に指定されている。

② 県指定文化財の『往生要集』

この書は比叡山横川の恵心院の僧都源信が寛和元年(985)に書いたもので、往生極楽に関する文を集め、念仏が極楽に往生する大切な行いであると説いた平安時代を代表する書です。当時の人々は死後にどんな所に行くのか大変不安だったのです。力のある貴族たちは仏法に帰依するために寺院を建立し、仏像を祀って極楽往生を願いました。しかし、民衆は何もできません。そんな民衆を救おうとする新しい仏教の誕生を促したのが、この往生要集だったのです。

その往生要集を具体化したのが法然上人です、彼が浄土宗を起こします。続いてその弟子の親鸞聖人が浄土真宗を起こしました。

③ 地獄の絵巻物

往生要集は漢文で書かれており、民衆は読めない人ばかりのため当時の手法である絵巻物にして、色を付け迫力のあるものにしたようです。例えば、オオカミ・トラが亡者を捕らえその頭をかじる場面、美女が手招きする岩場に剣の峰を上り、降りるときにも剣の峰をくだる、煮えたぎる湯のなかへ投げ込まれて釣り針で体を貫かれる…といったもの。

当時は八大地獄と言われ、等活地獄(殺生の罪)、黒縄地獄(盗み)、衆合地獄(淫乱の罪)、叫喚地獄(飲酒の罪)、大叫地獄（嘘つき)、焦熱地獄(悪い考え)、大焦熱地獄(尼を犯した者)などが考えられている。ということは殺しや盗みは当然として、今も昔も女性との正常でない関係は大きな罪だということが分かる。

4　キリシタン灯篭のある実相寺---浄土宗

　創立は江戸時代初期らしいがはっきりしていない、この寺には卍の印が付いたキリシタン灯篭がある。しかし、火袋とその台座はなくはっきり十字の模様が見えるわけでもない。ほんとにそうなのかと疑問になる。つまり、キリシタン灯篭と言えるには石の材質とか、そのいわれがきちんと伝わっていることがなければならない。そのようないわれをきちんと説明してこそ価値があるのだと思う。東浦の越境寺にもキリシタン灯篭があるが、ここには教育委員会の説明板にそのいわれが記されている。

①　　刈谷で一番古い仏様「阿弥陀如来坐像」

　この仏さまは 10 世紀末頃の作で、現在のところ刈谷市最古の仏像と言われる。高さ 47.9cm の小さな仏像だが、各部が厚く堂々としている。材質はカヤの一本木造りであり中空ではない、表面には黒漆を塗って金箔で仕上げている。

　阿弥陀様の頭のぐりぐりは『ニッケイ』というもので、知恵が詰まっているのだという。このことは時々聞くのだがすぐに忘れてしまう、ニッケイが無いからだろうか。

今回の見学で記憶を新たにしました、でもいつまで持続するかな…

実相寺本堂